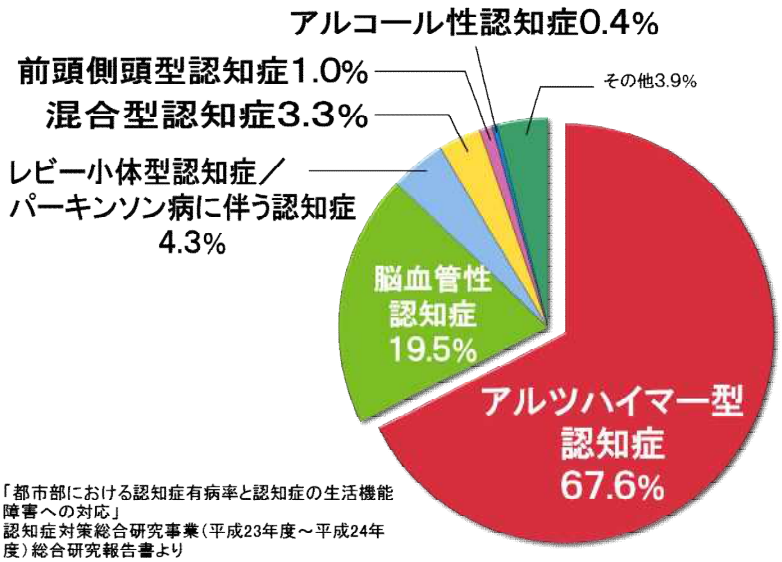
認　知　症　の　原　因

認知症の原因疾患とその割合



「都市部における認知症有病率と認知症の生活機能障害への対応」
認知症対策総合研究事業（平成23年度～平成24年度）総合研究報告書より

● アルツハイマー型認知症とは

・**一番多い認知症**で、脳内で異常なたんぱく質（βアミロイドたんぱく）が作られて脳細胞に溜まり、脳細胞が少しずつ壊れて脳が萎縮していきます。

・「いつ・どこで」という出来事の記憶が著しく悪くなり、出来事全体を思い出せなくなる（全体記憶の障害）のが特徴です。

・症状は比較的ゆっくりと進行し、機能の低下は全般的に進みます。

● レビー小体型認知症とは

・脳内に「レビー小体」という物質が蓄積された結果、脳の細胞が損傷を受けて発症します。

・うつ症状、もの忘れとともに具体的な幻視（部屋の中にヘビやネズミがいる、亡くなった人や知らない人がいるなど）があるのが特徴です。

・手足の震え、筋肉の硬直などの症状や、転倒を繰り返すことが多くなります。

・日によって症状が変動することがあります。

・日本人の小阪憲司医師の研究報告で世界的に知られるようになりました。

● 脳血管性認知症とは

・脳出血、くも膜下出血、脳梗塞などの脳血管疾患のために、病気が起きた部分の脳の細胞の働きが失われることで発症します。

・脳全体ではなく、損傷を受けた部分の機能が失われて「まだらぼけ」と呼ばれる状態になることがあります。

・片麻痺や嚥下障害、言語障害など身体症状が多くみられ、脳梗塞などの再発を繰り返しながら段階的に病状が進行するという特徴があります。

・生活習慣病に注意することが予防や再発防止につながります。

● 前頭側頭型認知症（ピック病）とは

・脳の前頭葉や側頭葉と呼ばれる部位が萎縮することにより発症します。

・初期から病識がなく、こだわりのある繰り返し行動（常同行動）、我が道を行く行動、抑制のきかない行動、食行動の異常などの症状が特徴です。

・言葉の意味が分からなくなり、言葉が出なくなる「失語」などの症状も見られます。

・比較的若い年齢（40歳代～50歳代）での発症が多くみられます。